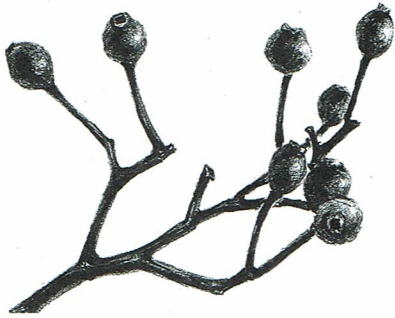


# 朝日 俳壇



〈ノイバラⅡ〉 日高理恵子

## うたをよむ 正岡子規の艶俳句

俳人の夏井いつきさんと俳優で映画監督の奥田葵二さんの共著「よもだ俳人子規の艶」(朝日新書)が刊行された。「よもだ」とは伊予(愛媛県)の言葉で「反省の精神をおとほげのオブラートでつつんだ」という気質、という意味だ。奥田さんは、瀬戸内寂聴さんからももらった「寂明」という俳号を持つ。正岡子規が詠んだ傾城(遊女)や遊里を題材にした一群の作品を「艶俳句」と名付け、夏井さんと語り合った。

〈傾城の董は瘦せて鉢の中〉。夏井さんが「頭で想像するだけでは決して出てこない」と解説。奥田さんもこう話す。「遊女の部屋を詠む場合、他にも分かります。アイテムがあったはず。鏡とか、着物とか、煙草とか……」「人工的に着飾った遊女と、本来は野に咲くべき董との取り合わせにハッとさせられます」〈捨置遊女の顔のあはれなり〉。夏井さんは「夏が過ぎれば無用の長物となる函扇。それを商品価値の薄くなってき

た遊女と重ねて、さらにまた(あはれなり)と最後に畳みかけている」。奥田さんは「極めて視覚的な文学である俳句に、物語性も強く漂わせるのが子規」。〈傾城の寝顔にあつしほつれ髪〉。奥田さんは「衰切さのエロティシズムが同居」と感じた。「妄想力」と自ら言う奥田さんの鑑賞の数々に、夏井さんは「奥田ワールド! 遊女の優さを感ぜさせる解釈だなあ」。

三枝昂之著「佐佐木信綱と短歌の百年」明治から昭和にかけて歌人・国文学者として大きな足跡を残した信綱の全貌に迫り、近代短歌史としても読める一冊。(角川書店・3300円)第28回若山牧水賞 宮崎県など主催。京都市の歌人永田紅さん(48)の第5歌集「いま二センチ」(砂子屋書房)が選ばれた。父永田和宏さん、母河野裕子さんと共に初の親子受賞。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

風信

### ◆長谷川 權選

- ドイツからもオランダからも秋一句  
 (埼玉県皆野町) 宮城和歌夫  
 行つたかも知れぬバス待つ秋の暮  
 (大阪市) 今井 文雄  
 曼珠沙華ぬはたまの夜の女王かな  
 (川越市) 岡部 申之  
 猿酒となりゆく洞へ夜々の月  
 (静岡市) 松村 史基  
 美しや翼すかせて鷹渡る  
 (津市) 中山 道治  
 大王のアリアのやうに朝の百舌  
 (取手市) 御厨 安幸  
 兵として死なぬ国なり菊かをる  
 (三重県明和町) 西出 泥舟  
 難民よ生きて故郷へ鳥渡る  
 (深谷市) 横澤 芳一  
 秋の灯やかたつて集めしマツチ箱  
 (東京都) 江川 盾雄  
 自然薯に同じ姿のなかりけり  
 (いわき市) 佐藤 朱夏

【評】一席。ハルトワーク洋子さんとモーレンカンブふゆこさん。日本を離れた二人。二席。あいまいなバスの時刻。何という心細さ。三席。夜の女王だったのか。冥界の王妃のようでもある。十句目。実は自然界に同じものなど一つもない。

### ◆大串 章選

- 懐かしの花の同期や新酒汲む  
 (羽曳野市) 菊川 善博  
 竜淵に潜みし夜を蚯蚓鳴く  
 (越谷市) 新井高四郎  
 鱒雲紙書き置きしメモ出している  
 (前橋市) 荻原 葉月  
 ふるさとの上りホームに用し柿  
 (横須賀市) 前田あさ子  
 廢駅に伝言板や雁渡し  
 (苫小牧市) 齊藤まさこ  
 またひとつ本棚増やす冬隣  
 (いわき市) 佐藤 朱夏  
 施設にも小さき図書室秋の灯  
 (合志市) 坂田美代子  
 退会の訳は語らず秋深し  
 (岩倉市) 村瀬みさを  
 亡き父母の温みよかの日運動会  
 (船橋市) 斉木 直哉  
 鴉のみ届く高さの熟柿かな  
 (泉大津市) 多田羅紀子

【評】第1句。軍歌「同期の桜」を口遊みながら新酒を酌み交わす。生きていてよかった。第2句。季語「竜淵に潜む」と「蚯蚓鳴く」の取合せがおもしろい。俳諧味あり。第3句。亡き母が書き残したメモには何と書いてあったのだろう。

### ◆高山れおな選

- 先生さけふの秋晴曬つばい  
 (仙台市) 松岡 三男  
 丸善の檸檬一個と戦争と  
 (東京都) 吉竹 純  
 おほかたは娶らずに馬肥ゆるなり  
 (東京都) 嶋田 恵一  
 晩秋の綿虫来たりひとりぼち  
 (川口市) 青柳 悠  
 さう言へば秋日和なりこんには  
 (横浜市) 込宮 正一  
 つそ寒や娘連れなる独裁者  
 (川越市) 益子さとし  
 面白き話に根と葉秋暮る  
 (境港市) 大谷 和三  
 海からの砂が育てる大根かな  
 (和歌山市) 佐武 次郎  
 ややこしい名の孫たちと辛煮会  
 (栃木県壬生町) あらみことし  
 背を向けしオランウータン秋思かも  
 (町田市) 岩見 陸一

【評】松岡さん。嘘っぽい程の空の青。心の弾みを逆説的に表現。吉竹さん。小説の檸檬は作者の詩心のうちで〈黄金色に輝く恐ろしい爆弾〉に。今は本物の爆弾が奈りにも気前よく消費される時。嶋田さん。季語・馬肥ゆるを裏読みした趣き。

### ◆小林貢子選

- 砲撃の跡に昨日と同じ月  
 (横浜市) 新倉 正一  
 愚かとは人間だけよ蚯蚓鳴く  
 (宮城県山元町) 山田 庸備  
 笠智衆見て居りそうな秋の雲  
 (さいたま市) 久保田恵子  
 残響の怪獣映画秋の雲  
 (西宮市) 西村 雄樹  
 さし色の縁置きつつ山粧ふ  
 (横浜市) 矢崎 悦子  
 書いてますか恋してますか彼聴屋  
 (武蔵野市) 相坂 康  
 秋晴れの土曜は車両二つ増え  
 (大津市) 司馬田智世  
 泣きやまぬ児を抱き新月と踊る  
 (所沢市) 安野 イマ  
 秋入日悲恋の如く野の果てに  
 (取手市) うらのなつめ  
 埋め草といへば背高泡立草  
 (相馬市) 根岸 浩一

【評】一句目。砲撃を受けた地は模倣わりし、そこに月光が降りそそぐ。月光は変わらず美しいのに……。二句目。「愚かな金魚」なんて思わない。人間だけだ。三句目と四句目を並べて読むと、秋の雲に様々な楽しさや味わいがある事を知る。